

EurekaXIII

六年制通信 No.16 令和7年7月18日(金)号

運を味方に

世の中には幸運にもいわゆるエリート街道を突き進んで立派な業績を残した人がいます。反対に、旧制中学や旧制高校の時代では、特に家庭の経済的な理由で進学を断念せざるを得ない人がたくさんいました。それで例えば家業を継ぐなりして満足のいく人生を送った人も多いと思いますが、可哀そうなのは勉学の意志が強く能力もあるのにその道を諦めなくてはならなかった人たちです。しかし、その人々の中には、一度は諦めたものの「向学心抑え難し」で独学の末に大学の先生になった苦労人もいます。私たち英語の世界では田中菊雄先生が一番有名ですかね、苦学の人としては。君たちはもう知る機会もないでしょうけど。興味のある人は『知的人生に贈る』を読んでごらん下さい。私が学生の頃は、一種バイブルのように扱われていた本です。

こういう苦学の末に功成り名を遂げた人というのは、人間如何に生きるべきかといった人生論のような本を書いてくれます。ご自分の努力の痕跡を書き残してくれるわけです。後に続くものとしては非常に励みになる部分もありますが、これほどの努力は自分には無理だと早々に参考にするのをやめる学生もいます。

森鷗外は16歳くらいで東大に入った超エリートですから、『智恵袋』のような警句集は残していますが、努力の跡を書いた本はないと思います。少なくとも私は知りません。夏目漱石と幸田露伴は同い年ですが、漱石は官費でロンドン留学を許されたエリートで東京帝大の英語教師ですからね。エリートを皮肉る言葉は小説の随所に見られますが、やはり人生論のようなものはないのではないかと思います。露伴は、これはもう苦労人もいいところですから、修養論とか努力論をいくつか書いています。『努力論』は長らく岩波文庫で絶版でしたが、ずいぶん前に復刻しましたから君たちも手に取れますよ。その本で運を手繰り寄せる人の心構えを露伴は何と言っているか見てみましょう。要約すると次の通りです。「どんな時にも他人を責めず、他人のせいせず、運命を呪わない。全て身に起こる不幸は自分の力が足りなかったからだと考える。そう考え、反省することでしか自分の力を伸ばすことはできない」、つまりすべてを自分が引き受ける覚悟を持っていること、だそうです。また、努力には直接の努力と間接の努力があることを指摘しています。努力が実を結ばないことは往々にして見られますが、露伴は間接の努力が足りないからだと言います。俳句を作ろうとして、どんなに五七五をひねり出そうとしても、基礎的な勉強が足りないとうまくいかない。間接の努力は言わば準備の努力、基礎固めの努力であると言っています。ただ、私は間接努力について露伴と違う考えをしています。紙面が尽きたので終業式でお話しますね。

夏休みのおすすめ

・道尾秀介 『いけないⅡ』 (文春文庫)

各章の最後に写真がついていて、それを見ると物語が違って捉えられる。前回同様面白い。いや、私は前回以上に楽しめました。ラストに近づくにつれてすべての謎が解けていく感じがカタルシスですね。明神の滝に祈ってはいけない、というのが大きなテーマとなっていて、ラストはこの滝に祈った者と祈っていない者とで明暗が分かれていきます。このあたりも上手です。毎度のようにちょっとイヤミスですけどね。

・松下龍之介 『一次元の挿し木』 (宝島社文庫)

ヒマラヤ山中で発見された二百年前の人骨を DNA 鑑定にかけると、四年前に失踪した妹のものと一致した。あり得ない鑑定結果を担当教授に報告しようとしたとき、教授が何者かに殺害される。全く展開が読めないミステリーでした。この鑑定結果は正しいのですが、そこから導き出される結論は一つしかない。途中から、ひょっとしてそういうことかなとは思いましたが、本のタイトルをよく見て、英語の先生ならもっと早く気づくべきでした。よくできた構想だと思いますよ。

・宮部みゆき 『さよならの儀式』 (河出文庫)

著者初の S F 短編集で、8 編が収録されています。カズオ・イシグロの『クララとお日さま』を読んで少し消化不良気味だったので、私はこの短編集の「さよならの儀式」を読もうと思いました。長い間一緒に暮らしてきたロボットとの別れを書いた短編ですが、近い将来、冗談ではなく君たちが大人になるころには、ここに描かれているような光景を君も経験するかもしれないと思いましたよ。

・原田マハ 『丘の上の賢人 旅屋おかえり』 (集英社文庫)

前に紹介した『旅屋おかえり』の第 2 弾、かと思いきや前作でカットされた一作品と、エッセイと漫画(丘えりかの上京シーンね)が収録されているのでした。これは前作を読んでいないと何も面白くないと思います。順番を間違えないように。カットされた一編は、うーん、これだけを読むと構成が安易すぎる気がして首を傾げる内容ですが、前作でおかえりファンになった私には、ま、これもありかなと思えました。

・中島 敦 『文字禍』 (角川文庫他)

若くして夭折した中島の格調高い文章を味わってください。私は何年生対象か忘れましたが、ベルホールで『名人伝』を朗読してきました。全く無駄のない文体で、非常に不思議で面白い、あるいは滑稽なことを大真面目に書いてある、しかも人間の本質に対する洞察も深い、そんな『名人伝』が大好きです。今回推薦の『文字禍』も不思議な不思議なお話ですが、じっくり読んでみて下さい。だんだん本当にありそうな出来事に思えてきますから。他にも『弟子』、『山月記』、『木乃伊』など、いずれも短編ですから読み上げるのにそんなに時間はかからないと思いますよ。

・司馬遼太郎 『坂の上の雲』 (文春文庫)

前にも紹介しましたが、何度読んでもいいと思いますからまた紹介しますね。これは小説日露戦争です。この小説で明治がどんな時代だったかがわかるでしょう。

BGM は TUBE の あー夏休み でした…。